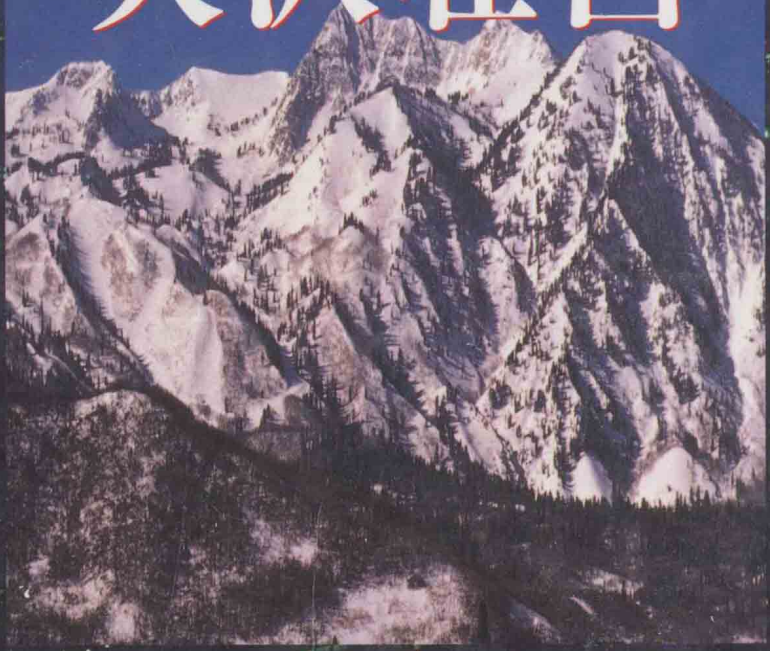
北の狩人

THE HUNTER FROM THE NORTH

大沢在昌



北の狩人

大沢在昌

幻冬舎

〈著者紹介〉
大沢在昌　1956年、名古屋生まれ。慶応大学中退。79年「感傷の街角」で第1回小説推理新人賞を受賞。91年「新宿鮫」で第12回吉川英治文学新人賞と第44回日本推理作家協会賞長編部門を、94年に「新宿鮫　無間人形」で第110回直木賞を受賞。近著には『炎蛹　新宿鮫V』『雪蛍』『眠たい奴ら』などがある。

北の狩人
1996年12月17日　第1刷発行

著　者　大沢在昌（おおさわありまさ）
発行者　見城 徹

発行所　株式会社 幻冬舎
〒160 東京都新宿区四谷1-22-6

電話:03(5379)8011(編集)
03(5379)8086(営業)
振替:00120-8-767643
印刷・製本所:中央精版印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。小社宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。定価はカバーに表示してあります。

©ARIMASA OSAWA, GENTOSHA 1996
Printed in Japan
ISBN4-87728-142-8 C0093

後記

以下の本を参考にさせていただいた。

『マタギを生業にした人たち』野添憲治　同友館

『山の人生　マタギの村から』根深誠　日本放送出版協会

『マタギに学ぶ登山技術』工藤隆雄・文　木部一樹・絵　山と渓谷社

『マタギ―森と狩人の記録』田口洋美　慶友社

また春蘭については、幻冬舎の斉藤順一氏に取材の手をわずらわせた。記してお礼を申しあげる。

ありがとうございました。

大沢在昌

本作品は、東京中日スポーツ・中日スポーツに一九九六年一月十六日より十月二十一日まで連載されたものです。尚、この物語はフィクションであり、実在する人物・団体等とは一切関わりありません。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

北の狩人

装丁　河野治彦
写真提供　イメージバンク

1

夕暮れの盛り場には期待が満ちている。おいしい思い、楽しい目、ぞくぞくするような刺激を求めて、何万人という人間たちが流れこんでくるのだ。

期待の中には、ひと儲けしてやろうというものも混じっている。パチンコ、麻雀、ゲーム機、カジノバー、そしてより非合法なギャンブル。さらには、カモを見つけてうまく有り金をはたかせてやろうという手合いだっている。いってみれば、期待を食い物にする連中だ。

彼らは、必ずしも見るからに危なげないでたちをしているとは限らない。

ひと目で悪人とわかるような姿では決してカモはひっかかってこない。といって美しすぎるのも駄目だ。洗練も度を過ぎれば、カモになるような田舎者は気おくれし、うまく罠の奥まで入ってこない。

罠のエサに最適なのは、若くてかわいらしく、見た目では決してそうとは思えない少女である。舌足らずな喋り方をし、まだ世間をよく知らないような大胆さを見せ、そして適当になれなれしい。

成熟した女性ではないが、といって子供でもない。そこに間抜けなカモはひっかかる。

もちろんカモの身ぐるみをはぐのは、彼女たち女の仕事ではない。背後にいるプロの受けもちだ。あっさりと、手際よく、そして情け容赦なく、カモの羽をむしり、肉を奪い、骨までしゃぶりつくす。

その手口は、盛り場が大きくなればなるほど、洗練され、機能的になっていく。それも当然で、カモにとっては一生に何度とない災難であっても、プロにとっては、「日常」の仕事にすぎないからだ。

こうしたプロは日本中の盛り場にいる。そして、最もそのプロの数が多く、プロどうしの競争が熾烈で、手口が完成しているのが東京の新宿である。

二千軒以上の飲食店を抱え、週末には四十万人を超す人間が流れこみ、しかもサービスを受ける側も施す側もさまざまな国籍を有している。この街でしか成立しない〝商売〟があり、この街を離れたら生きてはいけないと信じる人間も多い。

彼らから見れば街は生き物である。街は人を生かし、

ときに人を食う。食われた奴は死ぬまでだ。もしかすると自分たちは、街と戦っているのかもしれない、とすら思うことがある。盛り場で生きるというのは、街と戦うことなのだ。

勝てば大金、負ければ棺桶。

負けるのが恐ければ、街にこなければいい。戦いを挑まなければいい。

当然の話、勝つ奴よりも負ける奴の方が多い。

なのに人々は次から次へと街にやってくる。次から次へと街に食われていく。こうして街はどんどん肥えていく。夜明け頃、耳をすませば、新宿がゲップをする音が聞こえる筈だ。

新宿のゲップ——それは人間たちにはサイレンの音として聞こえている。

救急車、消防車、警察車、サイレンが聞こえるとき、ああ、また誰かが食われた、新宿の住人はそう思う。首をふり、息を吐き、ときにはにやりと笑って。

2

「あれいこ、あれ」

靖国通り、歌舞伎町一丁目の入口で背のびをしてカモを捜していたエリがいった。杏はその声にふりかえった。

夕方の六時過ぎ。桜はとうに散り、もうじきやってくる初夏の予感に街は華やいでいる。ゲームセンターの電子音と客を呼びこむビルのアナウンス、あちこちから聞こえてくる音楽で、ここだけ空気が濃い。

エリが見つけたのは、JR新宿駅の方角から横断歩道を渡ってやってくるイモだった。ジーンズに、真冬に着るような厚手のシャツを着て、バックパックを片手に提げている。

どこがどうとはいえないが、服装やあたりに向ける物珍しげな視線で、そいつが田舎者だというのはすぐにわかる。

年齢はいくつくらいだろう。二十にはなっているかもしれない。

「あんまりもってなさそうじゃん」

杏はいった。

「馬鹿ねぇ。ああいうのが都会でてくるときはもってんのよ。絶対いいって！」

エリは力をこめていう。そして杏が答えるのを待たず、横断歩道を渡りきった若者の前にとびだしていった。

「こんにちわー」
明るい声でいって立ち塞がる。若者は当然、足を止めた。
それはそうだ。茶髪でマイクロミニで、超かわいい十代の女の子ふたりに声をかけられたら、たいていの男は立ち止まる。立ち止まらないのは、ホモくらいのものだ。
エリは上目づかいに思いきりかわいい顔で若者を見あげた。
背が高い。ひょろりとしているように見えるが、まくられた袖からのぞく肘から下が意外にがっしりとしていることに杏は気づいた。
「あの、今日、これから、二時間くらい暇じゃありませんか」
エリが舌足らずな口調でいう。若者はエリを見やり、それから杏に目を移した。
杏はどきっとした。ハンサムじゃない。今の言葉でいうなら濃い顔で、杏の好みではない。杏は面食いだ。女みたいといわれるような、きれいな顔の男が好きなのだ。
なのに若者と視線が合ったとき、杏はどきりとした。
それは若者の目のせいだった。吸いこまれそうな透明感がある。まるで子供のように純粋そうな、きれいな目をしている。
まちがいない。折り紙つきの田舎者だ。
「あの、この先のお店で、友だちがパーティーやってるんですけど、男の人が集まんなくって、困ってるんです」
ふつうに聞けば、誰でも嘘とわかるセリフだ。なのに、十九歳のメチャマブの口からでると、たいていはだまされる。
「あたしたち、短大の先輩にいわれて、格好いい人、集めてこいって。会費は三千円なんですけど、食べ放題飲み放題ですから……」
エリが並べているのは、早番バージョンの文句だ。夜九時まではこのパターンで若いカモを捜す。一時間お茶して休憩したあとは、サラリーマンのオヤジ狙いだ。終電まで遊びたいけど、お金がないから飲みに連れてって、というやつ。十時になれば、オヤジはたいてい一杯入っている。
おう、よしよし、おじさん奢ってやるよ——酒くさい息を吐いて、にやにや笑いながらついてくる。
この先に、友だちがバイトしてるパブがあるんです。すっごいかわいい子。そこで飲も——そういって連れていくのだ。

ゲームのようなものだ。ひとり一万円。オヤジが金もってると二万円になる。
若者はエリのセリフが聞こえているのかいないのか、まだ杏を見ている。
髪は長くない。全体に清潔っぽい。
悪くはないな。いい目をしてる。
杏は前髪をかきあげ、にっこり笑った。
若者が頷いた。
「いい？　本当？　ラッキー！」
エリが嬉しそうな声をあげる。さっと若者の空いている左腕を抱え、体に押しつける。
慣れてんじゃん――それを見て杏は思う。エリの手は、わざと若者の左肘を胸のふくらみ近くにもっていっている。
若者が驚いたようにその手をひいた。赤くなっている。
「――いいじゃん、照れなくたって。アン、彼、あたしんだからね。ラッキー」
エリが芝居をつづける。
「とりあえず、いこ」
杏も意味ありげに若者の顔を見つめていう。
「うん、いこいこ」
三人で歌舞伎町の奥に向かって歩き始めた。
「――店は？」
初めて若者が口をひらいた。エリが口をへの字に曲げ、吹きだすのをこらえながら杏を見た。
訛っている、たぶん東北だ。
「この先。すっごいきれいな娘たくさんいるから。目移りしちゃ駄目だよ。そうだ、名前何ての？」
再びぎゅっと若者の腕を抱きしめてエリが訊ねた。
「カジっす」
「火事？」
「そうではなくて、木の梶です」
「ああ、梶さんね」
「梶、なんての」
杏が訊ねると若者はじっと見つめた。
「雪人っす。雪の人と書くんす」
エリがぷっと吹いた。
コマ劇場に向かって二本目の角を右に曲がる。そのまま区役所通りの方に歩いていくと、風俗店が立ち並ぶ通りにでた。点滅電球の看板が妙に多く、「イメクラ」「ファッションマッサージ」という文字に並んで、もっとどぎつい言葉や女の子の写真が貼りだされている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ここぉ！」
エリがいって、立ち止まる。「パブスナック　ルイルイ」という看板がでている。明りはついていない。扉は、音が外に洩れない頑丈なスティール製だ。
「入ってぇ」
エリが扉を開け、杏が背中を押す。
中は暗い。奥へ細長い、ウナギの寝床のような造りで、天井の明りが消えている上に、並んだテーブルのキャンドル風の赤いスタンドも、ふたつにひとつが消えている。
「あれぇっ。皆んなは？」
エリが無人の店内を見回して、素頓狂な声をだした。奥のキッチンとの仕切りの陰から、蝶ネクタイをつけた男が顔をのぞかせる。エリの先輩の江口だ。
「道がわからない子がいるんで迎えにいったらしいですよ」
「あっそ。じゃとりあえず、ビール！」
エリがさっと横長の椅子にすわっていう。
「すわって」
杏も若者の肩を押した。
若者がすわった。杏は少し驚いた。たいていのカモは、店に入ってくると暗いのに驚いて立ち止まったり、テーブルに足をぶつけたりする。なのに梶雪人と名乗ったこの若者は、テーブルと椅子の細いすきまに体をぶつけることなく、するりと入ったからだ。それにびびっているようすもない。
よほどのお人好しか間抜けだ。
「あたし、ジンライム。ね、梶さん、何飲む？」
杏はいった。
「――まだ明るいから……」
「いいじゃん。飲もうよ！　すぐ暗くなるって。じゃあ水割りね」
エリがいって雪人の腕をゆすり、勝手に注文した。杏も椅子に体をすべりこませた。雪人は、エリと杏のあいだにはさまれた格好になる。
江口がさっと、飲み物を運んできた。ビール、水割り、ジンライム、初めから用意してあるのだから早い。さらにコンビニエンスストアで買ってきた、カラ揚げやピーナッツ、フルーツなどのおつまみも手際よく並べていく。
水割りはめちゃくちゃ濃い。しかもボトルがテーブルの上にでてくる。中身は詰めかえてあるが、スコッチのボトルだ。
「はーい、乾杯ーい」

エリがビールのグラスを雪人のグラスにあてる。
「いっきいこ。ね、いっき」
グラスを手にした雪人にねだった。
雪人は困ったようにグラスを見つめ、それでもいっきに飲み干した。
「すっごーい、強ーい！」
エリと杏は手を叩いた。
「もう一杯、もう一杯」
さっさとお代わりを作る。再び、いっきコールで、雪人に飲み干させた。エリが煙草をとりだした。
「あっ、いけない。ライター忘れちゃったあ。雪人くんライターもってる？」
「いや……。俺は吸わないんで」
「俺なんていっちゃってー。似合わなーい」
エリが肩をぶつけて笑う。杏はシャネルのバッグからカルティエをだして、エリに貸してやった。
「サンキュ」
エリはセーラムライトに火をつけ、煙を雪人に吹きかけた。
「食べよ」
杏はいった。自分では食べる気はない。特にカラ揚げなんて、いつのものだかわかった代物ではないからだ。
「先輩、遅いよねー」
エリが目配せしていう。
「うん。どっか踊りでもいっちゃったのかな」
「まさか」
「君たち、いくつ？」
雪人が訊ねた。
「えー、十九。こっちは十八」
エリはいって、杏を指さした。これだけは真実だ。
「じゃ、本当は煙草も酒も駄目だ」
「何いってんのよ。オヤジみたいなこといわないの」
エリが体をぶつけ、雪人のグラスに酒を注ぎ足した。
そろそろだ。杏は、
「あたしトイレ」
といって立ちあがった。
「うん、いっといでー」
エリが頷く。杏はバッグをもち、店の奥の仕切りの陰に入った。そこでは江口と、江口の後輩ふたりが煙草を吸っている。そのうちのひとりの前を通ると、ぷんとトルエンの匂いがした。
トルエンを吸いつづけていると、吸っていない日であ

っても吐く息や体臭からトルエンの匂いが抜けなくなるのだ。

そいつは暗がりにしゃがんだまま、どろんとした目つきで杏を見あげた。脳が溶けてるのじゃないかという目つきだ。おまけに頭をつるつるに剃って鼻にピアスをはめている。

「すんだらベル打って」

杏は小声で江口にいった。よごれきったキッチンを抜けて、裏口から外にでる。携帯電話ももっているのだが、料金の滞納で止められてしまったのだ。

杏がでて五分もすれば、エリも抜けてくる筈だ。それから江口たちの仕事が始まる。とんでもない請求書をつきつけ、有り金をはたかせて、それでも足りなければ(足りないに決まっている)江口の先輩がやっているサラ金に連れていくのだ。身分証か何かあれば、その場で金がでる。

もちろんその金はとんでもない利子つきだ。契約書さえ交してしまえば、あとから交番に泣きついたってこちらのものだ。

雪人というあの田舎者に罪の意識は感じない。これは杏やエリにとってはリツのいいバイトであり、ゲームのようなものだ。あんなちょろい嘘にひっかかる方が阿呆なのだ。

三十分もたったら、カモの顔は忘れてしまう。

エリの話だと、江口はどこかの組に入っているらしいが、杏には関係ない。やくざとつきあおうとは思わないからだ。

やくざとつきあうのは、頭の悪い女だと杏は決めている。これは若いうちにしかできないバイトで、江口とかその仲間とは、仕事以外でつきあう気はさらさらない。第一、江口もいっているが、警察がうるさいのでこういう店は、三カ月かそこらで畳むのが利口なのだ。

杏は、エリと待ちあわせの喫茶店に入った。奥の席にすわるとチョコレートパフェを頼んで、足を組み煙草に火をつけた。いつも見かけるちゃらちゃらした男ふたりが今日もいる。陽焼けし、まっ赤な髪をしていかにも安っぽいダブルのスーツを着た彼らは、アダルトビデオのスカウトだ。杏も何度か声をかけられたが、気分は悪くないもののやる気はまったくない。

男ふたりは窓ぎわの席にすわり、表をいきかう人間に目を皿にしている。よさそうな女の子が通ったら、すぐにでもとびだしていって声をかけるつもりなのだ。テー

ブルにはこれ見よがしの携帯電話。
やくざも嫌だけど、こんな奴らも嫌だ。見かけばっかりで中身が何にもない。
そのとき不意に、さっきの雪人というカモの顔が浮かんだ。まっすぐで透明な視線を思いだした。
あんな田舎者。喋ったときの訛りは、本当にお笑いだ。だが、雪人のあの澄んだ目は、妙に杏の心に焼きついていた。

3

「もう、帰ってこないみたいですよ」
エリが店をでていって五分過ぎるのを見はからい、江口はいった。カモはおとなしくテーブルにすわっている。
江口はテーブルのかたわらに立った。客は無言だった。
「どうしますか、お客さん。まだ飲んでいきますか」
客が江口を見あげた。後輩が店の明りを強くした。
客の顔にショックの色はなかった。どんな間抜けでも、ここまでくればふつうならだまされたと気づく。なのにこの客はてんで落ちついていた。
よほどの阿呆か、こいつ。
「じゃあ、帰ります」
客は淡々といった。
「どうもありがとうございましたぁ」
投げやりな口調でいって、江口は勘定書をだした。テーブルの上には、ビールが二本、ジンライムと水割りのグラスがひとつずつ、スコッチのボトルが一本、カラ揚げや乾きもののつまみ、それにフルーツの盛りあわせがのっている。請求は、しめて二十二万五千円。
客は勘定書の数字に目を落とした。
「こんなお金、もってません」
静かな声でいった。驚いたようすもない。江口の後輩が無言で進みでた。ひとりが店のドアによりかかる。
江口は息を吐いた。まだ大声はださない。こういう奴は酔っぱらいのサラリーマンとちがって、おどさなくても思い通りにいくことが多い。
「いくらもってるんすか」
客が江口を見た。妙にまっすぐな視線だった。怒っているようには見えないが、といって怯えているようすもない。
「何だ、その目はよう」
江口はじんわりといった。

「新宿って、こんなに高いんですか」
「よそは知らねえよ。うちはこういうシステムなんだ。ちゃんと飲み食いしたぶんは払っていただかないとこっちも困るんだよ」
だんだんと口調をかえた。ドスン、という音がした。後輩のエイジが壁を蹴ったのだ。
「おらよ！」
空手の前蹴りの型だ。客はエイジを見やり、それから江口に目を戻した。
「いくらもってんだよ」
「これには足りません」
「だったら近くにいいとこあるからよ、そこいこうぜ」
「いいとこって？」
「身分証、何かもってんだろ。免許証とか……」
「何に使うのですか」
「決まってんだろうが。金借りて払ってもらうんだよ。なめてんのか、お客さん」
「事務所に連れていくのじゃないんですか」
客がいった。
「何だと、この野郎」
「連れてってほしいのか、ああ？」
エイジが甲高い声をあげた。
「田代組って知ってますか」
客が訊ねた。江口は眉をひそめた。聞いたことはなかった。
「何だ、そりゃ」
「あなたたちは田代組の人じゃないんですか」
「とぼけたこといってんじゃねえぞ！　立て、この野郎」
江口はどなった。まだ手をだすのはマズい。聞いたこともない組の名をだしているが、その筋ではないことは確かだ。このカモが警察に泣きこんだとき、手をだしていると厄介だ。
「田代組のことを知っている人はいませんか」
客はなおもいった。
「てめ、ふざけんじゃねえぞ」
エイジがつかみかかろうとした。江口はそれを腕で止めた。
「よせよ。お客さんよ、何だか知らねえが、払うもん払ってくれよ。払えねえっつうんなら、でるとこでるしかねえだろう」
客が立ちあがった。すっとした淀みのないその身ごな

しに、江口は思わずあとじさった。
「でましょう」
「上等だ、この野郎」
エイジが客の襟をつかんだ。得意の頭突きの体勢だった。額を男の顔面に見舞う。
入った、と思った。が、エイジのつるつるの額は空を切り、たたらを踏んでいた。客がぐっとエイジの腕を離したからだった。
特に力を入れたようには見えない。
「このう——」
エイジの顔がまっ赤になった。蹴りをいれたいのだがテーブルが邪魔になって足をあげられずにいる。
「暴力はまずいよ、お客さん——」
いいながら江口は腹をくくっていた。こいつは思ったより、ホネが折れそうだ。少し痛い目にあわせないと話が進みそうにない。ボトルの首をつかみ、テーブルからすくいあげて、横殴りに客の顔に叩きこんだ。
ガツッという手応えがあった。ギャッという悲鳴をあげたのはエイジだった。江口は目を丸くした。
いつのまにか客とエイジの位置が入れかわっている。いくらトルエンばかりやって痩せこけているとはいえ、こうも軽々とエイジの体を動かすことができるものだろうか。
「痛ってえよー」
エイジが泣き声をあげた。ボトルで頬骨のあたりが裂け血まみれになっている。それを見た瞬間、江口は切れた。
「てめえ!」
再度ボトルを客めがけてふりおろした。客の体が沈んだ。と、思った瞬間、江口は投げとばされていた。テーブルの上のグラスを吹っとばし、床に叩きつけられた。
背中をしたたかに打って、息が詰まった。エイジが転げ回っている。視界の隅でもうひとりの後輩が店をとびだしていくのが見えた。事務所はすぐそばだ。応援を呼びにいったのだ。
江口の体がぐいっともちあげられた。いつのまにか右手首を決められている。ボトルはどこかに飛んでいた。
江口は自分の目につき刺さってくる、客の澄んだ視線に怯えた。ふつうじゃない。とにかくふつうじゃない、こいつは。
「あなたの兄貴分のところへいきましょう」
「な、何いってんだ……てめえぶっ殺されてえのかよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com